

佐藤功一設計の4講堂の外装比較 日比谷公会堂に関する基礎的研究 1

○正会員 河田健*

佐藤功一	タイル	テラコッタ
大隈記念講堂	岩手県公会堂	武蔵学園大講堂

1.はじめに



図1 市政会館側の外観

市政会館・日比谷公会堂は、佐藤功一の代表作のひとつであり、1929年（昭和4年）10月19日に竣工。外観は、竣工当時の様子を比較的良好な状態で残されている。

この建物は、事務所ビルと公会堂の2つの用途の複合施設であり、国会通り側が市政会館、公園側が日比谷公会堂の正面である。市政会館側、日比谷公会堂側ともそれぞれ左右対称のファサードとなっており、柱型を出すことで縦強調のデザインとなっている。外装には茶系のタイルを使用し、パラペットや窓上の装飾や窓下の水切りにはテラコッタを使用している。佐藤功一は、市政会館・日比谷公会堂の設計とほぼ同時期に、岩手県公会堂¹⁾（1927年6月竣工・現存）、早稲田大学大隈記念講堂²⁾（1927年10月竣工・現存）、都城市公会堂（1927年10月竣工・1983年解体）、武蔵学園大講堂³⁾（1928年竣工・現存）と連続して公会堂もしくはその類似用途の施設を設計している。本稿は、これら佐藤功一が設計した類似用途の作品と比較しながら市政会館・日比谷公会堂の外観の特徴を考察するものである。

2. 柱型による縦強調の外観、スパン割について

市政会館・日比谷公会堂は、SRC造の柱型を外部に出すことで縦の線を強調するデザインとなっている。つまり柱の位置、スパン割がそのままデザインとなって表現されることになる。スパン割は、10尺を中心に、11尺、

12尺、13尺、14尺といった尺貫法によるモジュールで設計されている。岩手県公会堂や武蔵学園大講堂は同様に柱を強調したデザインとなっており、同じ系統のデザインと考えることができる。岩手県公会堂は10尺、12尺スパン、武蔵学園大講堂は12尺スパンを中心としており、尺貫法によるスパン割で設計されている。一方、早稲田大学大隈記念講堂と都城市公会堂は、壁を主体としたデザインであるため、スパン割は意匠表現との関係は薄い。

柱型を細かく見ていくと、柱は2~3段の凸状の形状で先端を細く見せる工夫を行っている。これは市政会館・日比谷公会堂、岩手県公会堂、武蔵学園大講堂3施設に共通しているが、市政会館・日比谷公会堂は先端見付面を約450mmまで絞り、90mmづつ段差をつけている。さらに2階部分、4階、南側は5階、6階7階、9階部分で柱を切り替え上に行くほど細く絞っていく。岩手県公会堂は柱型見付面は約600mm、にして3段、上部の塔の部分は500mmと600mmとしている。武蔵学園大講堂は柱型見付面は約600mmにして3段、側面の柱見付面は700mmにして2段の凸状の形状としている。⁴⁾

高さ方向について、市政会館・日比谷公会堂は、階高は1階：18尺、2階：14尺、3階4階：12尺、5階：15尺、6階：13尺とやはり尺貫法によるモジュールで計画されている。岩手県公会堂は1階：12尺、2階：13尺を採用し、2階の上部で柱を細く絞っている。武蔵学園大講堂は13尺を採用している。

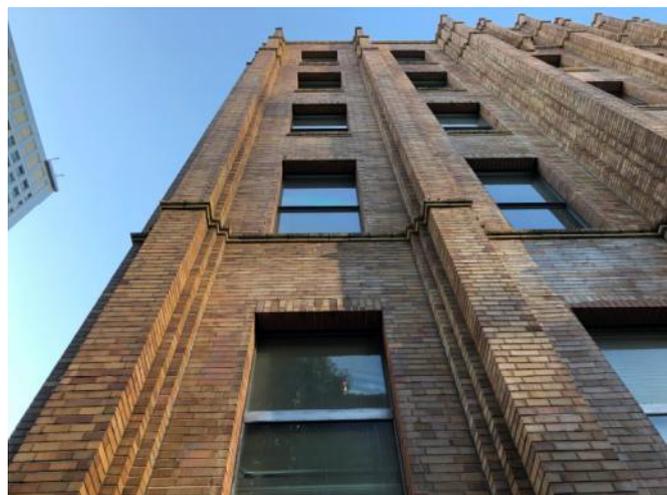


図2 柱の凸型のディテール

3.外装タイルの面形状について

市政会館・日比谷公会堂の外装には茶系複数色を組み合わせたタイルを使用している。表面には浅い縦溝が入っているがスクラッチはしていない。(図3)押し出しで形状をつくったタイルを採用していると考えられる。佐藤功一は、市政会館・日比谷公会堂の施工中に、愛知県の日本陶業武豊工場に自ら確認に行っている。タイル製作を担当した日本陶業の深谷辰次郎は当時を振り返り以下のように述べている。「市政調査会館用の外装タイルを10数種見本張りをして御目にかけてみると、先生は其れを東に向けたり、南北さまざまに角度を変へて色々光線の工合を見られ、また或ひは高く、或ひは低くして、建物全体の感じと対比されるなど、綿密で御研究心の深いのに感服いたしました。(中略)翌日再び工場へ来られて1日中同じことを繰り返しておられる。全く文字通り「心血を注ぐ」とはこのことだと思ひ、其御熱心に真から感銘して、工場一同のものが全力で盡したい覚悟致しました。」⁵⁾

なお、この時日本陶業武豊工場では、山梨県庁のタイルを製造しており、3日前に佐野利器が確認に来ている。ちなみに山梨県庁のタイルは、同様に茶系のタイルだが、縦線を強調した形状とはなっているものの、規則的に太い筋を入れている。

当時はスクラッチタイルが採用されることが多く、押し出しで面状をつくるタイルは比較的新しい製法を採用した可能性が考えられる。



図3 タイル面状

出隅部は役物タイルを製作している

佐藤功一は、この型押し面状のタイルを武蔵学園大講堂でも採用している。岩手県公会堂、早稲田大学大講堂は、引っ掻き傷のあるスクラッチタイルである。

4.テラコッタの使用について

テラコッタについて、市政会館・日比谷公会堂では、パラペット、公会堂側の窓上のレリーフや窓下の水切りに採用している。大阪陶業(株)の浅原眞一は、「佐藤先生にテラコッタを通じて、始めて知って頂いたのは昭和3年である。この頃、東京市日比谷公会堂の設計にテラコッタを使用されたが、一部工合が悪いことがあったようで、それらこれやで私共との間に、接触が始まったように記憶する。」⁶⁾と述べている。

大阪陶業は、戦前期継続的に佐藤功一作品に関わって

おり、佐藤功一が色彩や彫刻にもこだわりが強かったことを伝えており、「先生自らヘラを持ってここかしこを訂正せられる。」⁷⁾と述べている。

テラコッタの採用について、岩手県公会堂では、大ホールのエントランス部の額縁や通用口の額縁、壁面レリーフなど7種類25か所にテラコッタが採用されている。早稲田大学大隈講堂では、伊賀窯業(株)のテラコッタが採用されており、パラペット部分、円形窓や窓飾りのレリーフなどに採用されている。武蔵学園大講堂では、パラペット、アーチ窓の上部の飾りや窓台に擬石を使用しているがテラコッタは使用していない。規模からみると市政会館・日比谷公会堂はテラコッタの使用箇所が少ないように感じられる。



図4 テラコッタのレリーフと擁壁の笠木

5.まとめ

市政会館・日比谷公会堂の外観について、ほぼ同時期に佐藤功一が設計した4つの公会堂等の施設との比較を行い、その特徴について考察を行った。

柱型をデザインとして用いた外観は、平面・断面ともに尺貫法を採用したモジュールが採用されていた。

市政会館・日比谷公会堂では、柱を細く見せるための凸型柱の見付寸法が最も小さく、またタイル面状は縦線の押し出しタイルしている等の特徴がみられ、縦線を強調することによりかなりこだわったデザインとなっている。

テラコッタの使用については、建物の規模を考慮すると他の作品に比べて使用量が少ない。

註釈

- 1) 岩手県公会堂については、竣工時と思われる青焼図面が存在している。
- 2) 「早稲田大学大隈記念講堂保存再生工事報告書」早稲田大学 2008.3 に建設時の概要がまとめられている。
- 3) 武蔵学園大講堂については、竣工時の図面の複写が存在している。
- 4) 凸型の柱型の寸法は筆者実測による。
- 5) 深谷辰次郎「心血を注がれた市政調査会館の建築」佐藤功一博士 田辺泰、猪野勇一編 彰国社 1953 pp.101-102
- 6) 7) 浅原眞一「佐藤先生とテラコッタ」前掲「佐藤功一博士」 pp.100-101